

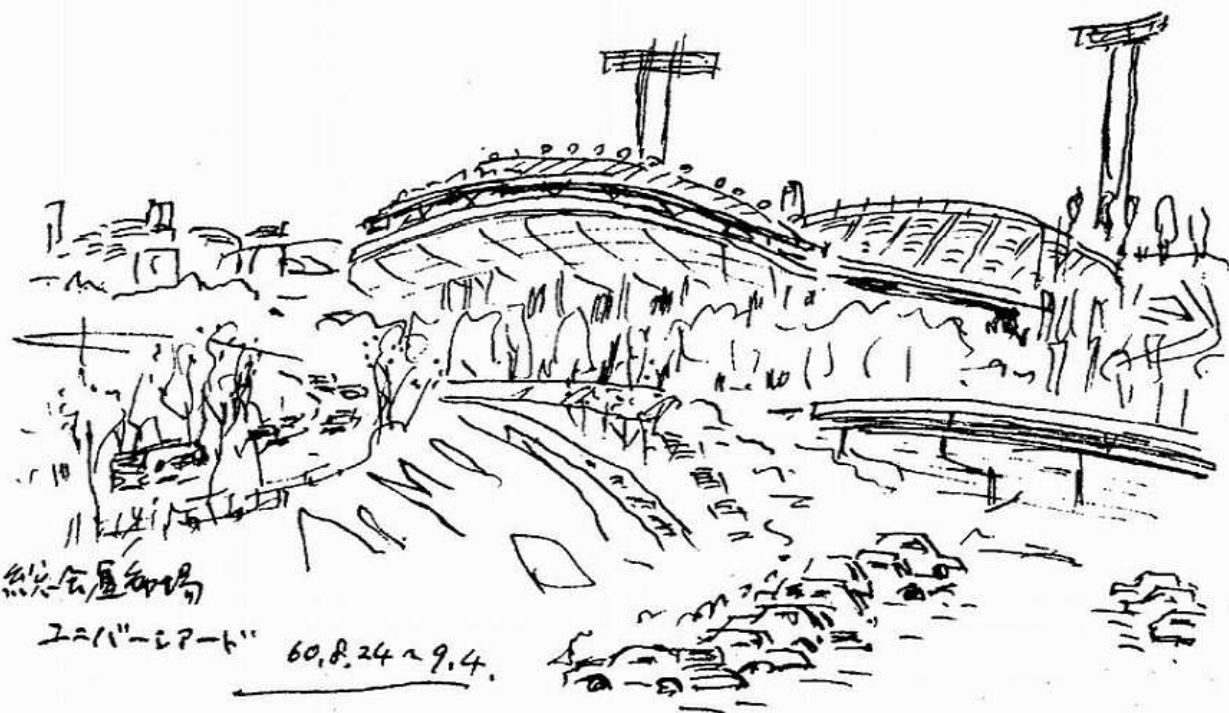
佐保会兵庫県支部だより

第 9 号

佐保会兵庫県支部事務局

神戸市東灘区西岡本6-9-18

☎ 658 電 078 - 431 - 5004



林利三郎氏画

卒業五十年におもう

魚崎 茂子 (昭10・理)

待ちに待った七月十六日、この日は奈良の井田康子様を中心に数名の方のお世話で、卒業五十年の文理家合同の会が魚佐旅館で開かれました。

まずは各科別の集りで、私達理科は担任だった半田先生の奥様をお迎えし、先生の思い出話に花を咲かせました。夕方からはただお一人ご健在の矢野先生をお招きして全員で会食。先生のお話し下さる当時の先生方のご様子など、一同懐かしく懐かしく伺い、食後は三三五五集っていつまでも話がはずみました。

ふり返っての五十年。戦争という大変な事を経験しましたが、今思えばずいぶん短く感じます。

卒業当時は初任給七十円でしたが、京大など出られた男子の方が月給五十円で小学校代用教員をされていた時代、女子はなかなか就職できない不景気な時代でした。手紙三銭、葉書一銭五厘の頃でした。満州事変に始まり太平洋戦争へと戦局も次第に激化し、男子出征のあとを女子が補充、私も歴史の授業までしました。更に後、上

級生は軍需工場へ、下級生は食糧増産の畑作りと激しくなる空襲下ひもじさに耐えて頑張りました。空襲のあと生徒の安否を尋ねて焼跡を歩き回りましたが、何人も教え子やそのご家族の死には今も胸が痛みます。

二十年終戦、二十三年進駐軍による学制改革、男女共学と思ってもよらぬ教育の変革にとまどいながら、被災した私も新しく勉強のやり直しをしました。

思い出は尽きませんが、今私達は既に現役を退き、老人病と孫の話が中心の年代になりました。お互いあの悲惨な時代の事には触れたくないのかも知れません。

翌日は母校の講堂で小倉遊亀先生の綴帳を見せて頂き、あまりの素晴らしさにただただ感動するばかりでした。

約九十名の同期生中今回は四十四名が集まりました。五年毎だったのを三年毎にと約束して別れましたが、次の会には何人集まれるだろうかと卒業五十年の重味をお互いにしみじみ感じたことでした。

叙勲のお慶び

ごあいさつ

津野貞子

(昭8・家)



出来ました。胸が締めつけられ、喜びも悲しみも溢れる涙に昇華されました。

私を支えて下さった周囲の方々の深く厚い愛情と励ましに対して満腔の感謝を捧げつつ、皇居春秋の間で暫し冥想に耽り、立ち去りがたい思い出でした。

終りになりましたが、佐保会兵庫支部より香炉をお祝いに頂戴致しましたことを厚くお礼申し上げます。

津野先生との出会い

安達英子(昭18・文)

架をかついでの匍匐訓練などは特につらい思い出ですが、どんな時でも津野先生が陣頭指揮で皆を励まし引張って下さいました。匍匐の小休止で、地面に頭をつけて見上げた空の青さと、一輪の紫の花の美しさを今も思い出します。

津野先生は寮の舎監もして居られました。当時寮総代だった高槻在住の細川さんとお会いして先生の思い出を語る機会を持ちました。その時の話から終戦当時の事を拾ってみます。

のあたり立たせ給へり」と。

昭和六十年春の叙勲に際し、勲三等宝冠章を授与されました。非才の身でこのような栄光を賜わりましたのはひとえに皆様の御支援のお蔭と深く感謝して居ります。

すが、私は自分一人に噛んで含めるように語りかけて下さった気がして涙が止まりませんでした。

思えば明治の最終年に誕生し、大正、昭和と生き続けてきた私共

去る五月二十三日、東京国立劇場で勲記と勲章を拝受し、引続き

の年代の者にとっては勿体ない話ですが、将に天皇陛下と苦楽を共にしたとさえ思えるのです。女高

した。前日までの雨がうそのように晴れ上り、真夏のような太陽が

師の何年の時だったか、大阪城東練兵場で大観兵式があり、各クラ

雨に洗われた皇居の緑を一層鮮かに見せ、よく手入されたさつきつ

スから一名出席することになりました。私は既に母校(青島日本高等女学校)への奉職が決っていた

つじの愛らしい花も見事でした。

ので、是非私を選出してほしい、母国を遠く離れて教育に専念しようと思ふ私には、今後陛下を眼前

天皇陛下より「教育と研究一筋

にお迎えることは絶対にあるまいと思われしました。クラスは自薦

に励みこの荣誉を得たことは誠に

する私を全員一致で選出してくれました。当日私は大喜びで城東練

喜びに堪えない。今後も体に気をつけて、国家・社会に貢献するよ

う一層の精進を希望します」とのお言葉を賜わり感激で胸が一杯になりました。陛下は御誠実なお人

柄と申しますか、直立不動や前傾の姿勢で、一人々々の顔を御覧

兵場に響き渡れと大合唱に加ったのです。もろもろの思いを胸に秘

なるように語りかけて居られま

めて「わが大君、わが大君、今眼

のあたり立たせ給へり」と。

その後の五十有余年、身に危険を感じる激しい排日運動。陸戦隊の人垣の中の通学通勤。またある

時兵隊さんに守られての生徒の遠足遂行。匪賊に襲われる修学旅行。兵舎で起居を共にした動員。

敗戦後の無警察状態の中で祖国を心配しつつ過した生活。わがふるさととは日本、どこでもいい日本にさえ辿りつけばとリュック一つでの引揚げ。戦後の学制改革による

新制大学の発足。勉強のやり直しと、京都大学で若い院生にまじっての研究生活。……

若鷲のように大きな夢だけを持って海外に羽搏いた一介の教育未熟者が、五十有余年の苦難の歳月を経て今、教育研究功労者として陛下を眼のあたりに拝することが

出来ました。胸が締めつけられ、喜びも悲しみも溢れる涙に昇華されました。

私を支えて下さった周囲の方々の深く厚い愛情と励ましに対して満腔の感謝を捧げつつ、皇居春秋の間で暫し冥想に耽り、立ち去りがたい思い出でした。

終りになりましたが、佐保会兵庫支部より香炉をお祝いに頂戴致しましたことを厚くお礼申し上げます。

昭和十八年九月三十日、学徒出陣の時代に「海ゆかば」に送られ学窓を巣立った私の任地は、満洲国の首都新京市の「新京敷島高女」でした。「碧の屋根、真白の壁」校歌に歌われていたその美しい校舎には、津野先生が先輩として迎えて下さいました。

当時の女学校生活は、始業前の一斉掃除や朝礼などキビキビと気持のいいものでした。昼休みに校舎の外回りを駈けた事、郊外の宮廷府予定地という曠野の一隅での農耕作業、地平線まで続く広大な飛行場の片隅で、若い将校に指導されての担架訓練。四人一組で担

架をかついでの匍匐訓練などは特につらい思い出ですが、どんな時でも津野先生が陣頭指揮で皆を励まし引張って下さいました。匍匐の小休止で、地面に頭をつけて見上げた空の青さと、一輪の紫の花の美しさを今も思い出します。

津野先生は寮の舎監もして居られました。当時寮総代だった高槻在住の細川さんとお会いして先生の思い出を語る機会を持ちました。その時の話から終戦当時の事を拾ってみます。

記念品贈呈

—卒業五十五年を

お祝いして—

昨年が続いて、今年も次の方々に長寿のおよろこびをこめた輪島塗のお箸をお贈り致しました。一口に五十五年と申しますが、女高師卒業以来の、並々ならぬ時代をみごとに生き抜いて来られた方々の歩みは、まことに貴重なものと申せましょう。

塗り重ねた堆朱のように、今後ともお健やかな日々をお重ねくださいますことをお祈り致しますと共に、ご健康のおすぐれでない方の一日も早いご回復を心から願っております。

赤崎信子様 (家) 芦屋市

稲岡久美様 (家) 明石市

兼田孝代様 (文) 伊丹市

高島春江様 (文) 神戸市

椿 春子様 (家) 神戸市

船久保トメノ様 (家) 芦屋市

村上 恵美子様 (理) 姫路市



坂根 洋子

(家・食)

この度の佐保会の総会では楽しい一時を過ごさせて頂き、又、種々の方面でご活躍の方々がたくさんいらっしゃることを知って、入会したことの喜びと、私もがんばらなければという緊迫感とで、少々戸惑っています。

現在は、県立伊川谷高校の家庭

新しい息吹きを

—新入会員の方々—

安東 真紀

(文・英)

八月のある日曜日、斑鳩の里を訪ねました。よく晴れた、暑い日でしたが、法隆寺から少し離れると人影もまばらになり、緑豊かな田園地帯を心ゆくまで楽しむことができました。なかでも、遙かかたに大木に囲まれるようにしてひっそりと立っている法起寺の三重塔の姿を発見した時は、そのあ

科の非常勤講師をしています。3年には、選択で食物を専門にしているクラスが1クラス設けてあるので、このクラスのごことは全部任せてもらっています。

まだまだ未熟なので、教える立場にありながら、教えられることの方が多くて、今の私にとっては一つ一つが自分の勉強になるのでうれしく思いながら仕事をさせて頂いています。

私なりにがんばるつもりです。今後共ご指導の程、よろしくお祈り致します。



河原さゆり

(文・国)

社会人の仲間入りをしてから、早くも四月となりました。現在県立神戸高校にて、新米教師として悪戦苦闘の毎日を送っております。同校には、大先輩の東昌子先生、昨年修士課程を修了された松本明美先生も勤務しておられ、たいそう心強い次第です。

教科の方は、国語を担当しております。国語は苦手、古典など目のかたきといわんばかりの生徒達に、国語の楽しさ、美しさを少しでも伝えたいと思いつつも、下手な授業で、かえって国語嫌いに拍車をかけているのではないかと罪悪感にかられたりしております。自信を持って教壇に立てるよう、努力したいと思えます。どうぞよろしくお祈り申し上げます。



仕立直しの洋服をなさった先生のことは今度初めて知りました。この度のご受勲は女性としての最高位と聞いています。ここに至られるまでの専門のご研究についてのご苦心などは、折にふれ伺いましたが、その他のご苦勞のことは平素余り表に出されない先生のお人柄に改めて感服致しました。

これからもご専門の事ばかりでなく、先生の豊かなご体験から多くのことを学ばせて頂きたいと願っております。

お祝いの言葉をということでしたが、先生の若き日の一端を知って頂けたらと思ひ書かせて頂きました。

今年度の支部総会には、若さあふれる六名の新しい卒業生の方々が出席、一言ずつごあいさつを頂いて会場に花を添えて下さいました。

その中の三名の方から頂いたお便りをご紹介いたしました。

事務局へは二十三名の新しい方々の入会申込みがあったと聞いていますが、今後それぞれのお仕事の中で、大いに若い力を発揮して活躍なさいますことを期待しております。

どうぞよろしく

― 転入の方から ―

井上 たみ

(昭15・家)

兵庫には、ご縁が深いのでしょ
うか、卒業して直ぐ武庫川高女に
勤めまして、支部で歓迎会をして
いただきました。

その後、故郷の三重に帰り、勤
めの方も二度ばかり辞めたり又勤
めたり誠に勝手でしたがお陰で
お陰で学校生活には、深刻な苦勞
もせず過ぎていただきましたこと
とは、ひとえに母校の名によるも
の感謝しております。

学校生活を終り84年5月神戸の
息子の所に参りまして、再び兵庫
支部にご厄介になることになりま
した。このことを支部長さんに届
けましたら早速ご連絡下さいまし
て事務局の内山さん、そして直ぐ
近くにお住いの寺尾さんからも佐
保婦人学級のご案内をいただきました。
こんなにお心遣いいただき
て、と感謝しまして六月から婦
人学級にも出席し今年も引続き受
講して、いろいろと得る所が多く
喜んでおります。
支部にお世話になって一年。い
ろいろな意義深い企画に参加させ

ていただいたり印刷物をいただく
につけ、随分と活動分野が広く、
流石と思うことの多い昨今です。
そして、その都度、皆さんから、
ご親切なお声をかけていただいた
おかげで、誠に楽しく過させてい
ただいております。今後ともどう
ぞよろしくお願いいたします。



山崎 渺美
(昭39・文・教)

大阪の千里ニュータウンより声
屋浜に転居し、ついで仕事でも大
阪より神戸に転勤になり、梅田よ
り三宮の方を身近に感じ始めたこ
ろで、このたび佐保会兵庫県支
部に入会させていただきました。
卒業して二十余年、家庭裁判所
にずっと勤めております。全国に
先輩、後輩も巾広くおられます。
夫婦の問題、親子の問題、ある
いは老人扶養と、世の中の動きが
もろに出てくる仕事内容に加え、
広域移動が多い職場で女性が働き
続ける意味について、考えさせら
れている今日この頃です。
今後ともいろいろの場所であ
る方にお目にかかりたく思っ
ています。どうぞよろしく願
いいたします。

豪州研修旅行で

学んだこと

天川 葵

(昭36・家・食)

教育者には向いていないのでは
ないかと常に疑問を持ちながら、
研究生活を経て園田女子大にお世
話になって十三年がすぎました。

園田女子大では、国際化の波に
乗って豪州のグリフィス大、ニュ
ージランドのクライストチャーチ
教育大と姉妹提携を結び、毎年30
名の学生交換と、学生同志の共同
研究をしています。私も、学生に
同行して、生れて始めて豪州での
生活を体験して参りました。25年
も前に習った英会話は見事に忘れ
ていましたし、この年齢になって
のにわか勉強は何の役にも立たず
大変心細い思いでしたが、学生と
共に寮生活をし、一般家庭に一人
ずつホームステイして、生活を共
にする事で、観光旅行では知る事
のできない豪州人の中身に触れる
事ができました。そして、出発前
には、どうなる事かと心配してい
た学生達が、短い期間に見違える
程たくましく成長し、豪州の学生
達との共同研究を堂々と進めてい
くのを見て、フィールドでの教育
の大きさを知り、教師としての喜
びを初めて知る事ができました。

十七年ぶりの

職場復帰



小柳 いすず
(昭40・文・英)

懐しき奈良の学び舎を後にして
ちょうど二十年。同年配の友が、
子育ても一段落して再就職した。
私自身にも、私立高校の非常勤講
師の話が持ち上った。主人の兄弟
の応援もあり、比較的あっさり
主人よりOKが出た。

大学卒業後、某県立高校で三年
間教鞭を取って以来十七年ぶり
である。結婚後ずっと二十名ほどの
高中小学生に家庭で英語を教え
きたとは言え、浦島太郎の感があ
る。又、非常勤と言えども、教師
という職業は厳しい。甘かった
欲を燃やし始めた。
大阪府内の片田舎にあるS高校
は、男女共学と言っても、クラス
は男女別々である。数年前まで女
子校で、女子生徒には独得の雰囲気
がある。私たちは創立者の娘
だ、という誇りである。
女生徒は、誤りを訂正する際に
も配慮が要るし、気を使うという

私の先入観を、彼女達は打ち破
った。何事にも前向きである。授業
中ザワつきが生じて、誰かがシ
ーと合図をする。すると他の誰か
がシッーと合図を重ねる。それで
ザワつきは止み、いっせいに百十
の瞳が私に注がれる。魅力ある教
師となって応えようと決心する一
瞬である。

一方、私の持つ男子クラスには
反骨精神旺盛な生徒が多く手を焼
く。彼等から信頼を勝ち得ていく
のが私の今後の闘いである。

私に反発し、全く勉強しないK
に悩んだ事もあった。対話の機会
を待った。「先生が気に入らな
くても、勉強しなかつたら、自分に
負けたことになるのよ」と訴えた。
すると、何んと「わかりました」
と思いきや返事が来た。それ
以来、Kは心なしが明るくなり、
つっぱりが外れた。

怖いのは大人の硬直した物差し
で測ることである。柔軟性を取り
もどさねば、と思う。四十代にし
て、自己の成長を真剣に願いつつ
学ぶ場を与えられたことを心より
感謝している。

間もなく夏休みが終わり、再び
楽しき悪戦苦闘の日々が始まる。
誤って生徒を叱ることが無いよう
に折って一日をスタートしたい。

高校卒業以来、淡路島を離れて暮すようになってもう二十年近くになります。年に数回は父母や姉達の住む島に帰ります。

淡路に行くのも帰るといい、神戸に戻ってくるのも帰るといい、矛盾した表現を当り前のように使っ

故郷「淡路」を想う

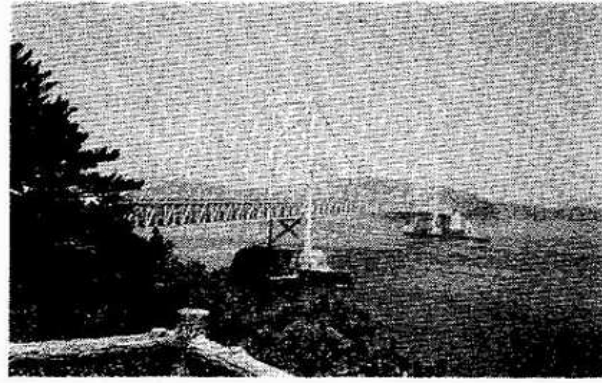
山形 泰子

(昭45・文・英)

てきました。少しも不自然でないのは、故郷とはそういうものだからなのでしょう。

淡路では今年、「くにうみの祭典」が開かれ、各地で多彩な行事が催されました。おのころアイランド・ファームパーク・大鳴門橋記念館など、自然をうまくとり入れ、小さい規模ながらも、淡路ならではの博覧会でした。

また、東洋一といわれる大鳴門橋も開通しました。山の切れ目から銀色に光るつり橋を初めてかいま見た時は、一枚の大きな絵の前に立っているようで、雄大な美しさを感しました。橋の四十メートル真下でしぶきを立てて荒々しく



ぶつかり合ううず潮を見ると、足元がすくむ思いでした。

久しぶりに島のあちらこちらを訪れました。各会場を結ぶ道路はきれいに整備され、どこかよその町を走っているような錯覚にしばしばとられました。緑の畑を渡ってくる風がひんやりと頬にあたる。昔とかわらぬ香りを運んでいきます。何だかごちゃまぜの複雑な

気持です。

しかし、これが今の現実の姿でないかと思えます。多くの人々が島を訪れたり、新しい道や建物がどんどんふえる中で、島の様子は日毎にかわっているようです。

便利さもにぎやかさも昔とはくらべものになりません。子供の頃は二時間半も船にのって、腹底にひびくエンジンの音を聞きながら神戸に出ることが大旅行でした。人は船にのって島に来、船にのって島を出てゆきました。

そして今、明石大橋建設の動きも活発になっています。淡路島が島でなくなる日がいずれやってくるのでしょうか。夢の架橋の実現は、島の人達の生活や心を大きく変えるでしょう。開発という名のもとに様々な公害が緑の島にも押し寄せないようと思います。便利さとひきかえに島の人達の心を置き去りにしないよう祈ります。

洲本の家で、朝、「椰子の実」のメロディーが曲田山から流れてくるのを聞きました。今でも一日三回、オルゴールが鳴っているそうです。ここにもまだ「ふるさと」は残っていました。

ユニバーシアード神戸大会と

ボランティア

高岡 美知子(昭30・文・国)

学生のオリンピック、ユニバーシアードを神戸に誘致して、八月の炎天下で華々しくスポーツ絵巻がくり広げられた。これは国際都市神戸ならではの英断であり、国の財政的援助なしに、地方が独自の才覚で運営をとりしきったのは近來の快挙であったと思う。

私も勤務先の短期大学の学生が全国歓迎学生の催しに参加するというので、いささか関わりを持った。選手入場に先立ち各大学の校旗を持って学生連が入場し会場に花を添えたのである。全国百七十大学、三百数十名の学生を迎えて、地元でこのように大きな国際的行事が催され、同じ学生としてささやかながら参加できたことを代表達は大きな感動を持って語っていた。

この大会はまたボランティアの多きでも大きな話題を呼んだ。さまざまな分野で多くの市民が奮闘した。これはボランティアへの理解の浅い日本の社会的風土の中で特筆されてよいことだと思う。ただ問題がなかったわけではない。

い。新聞に散見するだけでも、フランス語の通訳が決定的に不足していたとか、通訳ボランティアが「補助」と役割を理解していたにもかかわらず予想以上の責任を持たされて困惑している等。組織委員会が経費節減の意味から安易にボランティアに頼り、意志の疎通や情報の伝達を助けるという重大な責務を持つ通訳に十分な能力を具えた人達を確保していなかったのではないかと惜しまれる。

とはいえ、自分の意志で、善意で、大会運営の裏方を支えて来たボランティア達に心からの賞賛を贈りたい。趣味を伸ばす、技を磨くだけに留まらず、一歩踏み出して自分の持てるものを社会に貢献しようとしたその意欲！

「豊かさ」の質が変わって来た。金では買えないものをどれだけ持っているか、自分は他人に何を与え、何を残してゆけるかが「豊かさ」の中味になって来つつある。この大会を通し「生きがい」と「ボランティア」について、私はあらためて考えさせられた。

「内蒙古点描」

八木 静子 (昭9・文)

八時半内モンゴルの首都フホトを出て大青山を越え標高千三百米の蒙古草原を北へ、更に東へ走って丁度十一時四子王旗につく。

(旗というのは本来元帝国の軍制の単位であったのだが、清朝が蒙古族を統括する為の行政単位に利用して以来現在まで他地方の県に当る行政区になっている。県は日本より小さい単位で四子王旗は二万五千人位である。)ここからはもう道らしい道はない。草原内の二本の轍の跡を辿ってマイクロバスは走るのだが、向うに何の目標物もない広っぱを、車の轍だけを使い走るのには誠に心細いものである。大まかな起伏はあるので目路の限りになっていた丘に上ると又視野が開ける。一時間余りも走ったろうか。丘の稜線上に小さな点が一つ現れた。我々の目指す白音胡少である。この生産大隊の事務所前で車は止った。人も草も吹き倒す様な強い風が吹き抜けている。ここで事務所全員の出迎えをうけ昼食の後包で一休みする。包は直径八米位の円形。我々四人が大の字になってねころんでもゆ

ったりしている。入口に靴脱場、

包の中央には囲炉裏が切つてあって、その真上の天井は半月形に被いが除かれ青空が見えている。明り採りであり空気抜きでもある。強い風にあふられて被い布がパタパタと絶えず音をたてる。包は分厚いフェルトで周りがつつまれ、更にその外側は防水布で被われ網で締められている。天窓から裸電球が一つ。これが日没から十時迄包の中を照らしてくれる。十時以後は各自持参の懐中電燈が頼りである。人間生活に必需のトイレは五十米も東の方に公衆便所風のものがあるだけである。水の不自由な所だから手洗水などももちろんない。今度の旅程ウェットペーパーが役立つことはなかった。朝晩の洗顔もこれで賄った。

三時から牧民の家(遊牧民の定住化政策による煉瓦造りの家)を訪ね仍茶の接待をうけた。仍茶とは磚茶という蒸した茶の葉を煉瓦状に固めたものを削ってたき出し牛乳・羊乳を加えたお茶で、一見ミルク紅茶のようである。そこへ粟・黒砂糖・チーズなどを入れて



飲む、大変栄養価の高いものである。このあと羊の遊牧地を見て再び白音胡少に戻り、乗馬・駱駝乗りなどの草原の遊びに年を忘れたり、蒙古相撲の観戦、歌舞団による珍しい馬頭琴の演奏などに興じた。夕刻よりのキャンプファイヤーではオランダ人旅行団との合同営火となり、最後は陽気な彼らと全員で腕を組んで歌った、日蘭両国語による「螢の光」のメロディが心地よく草原の闇に流れる。

上や北よりにあった北斗七星はずっと北へ動いて地平線スレスレに光っており、牽牛・織女の二星が丁度頭の真上に、天の川が真白い布を敷いたように東北から南西へ流れ「ウワーツッ素晴らしい」と思わず声をあげてしまふ。寂として声のない大空間。人間の造り出した光の一切ないこの大草原を無数の星のキラメク大空が被っているのだ。



一夜があげ岡の上のオボに立寄る。小高い岡の少し平坦な地に三米四方、高さ二米位の土饅頭型の石積みがある。上には木製らしい塔の九輪に似たものが差し込んで立てられ、これを中心に四方五米位の間隔で同様の小型の石積みがあり、それには二米位の棒が立てられていて、中央から夫々の棒の先へ綱が張られ、色とりどりの布切れが結び付けられている。丁度ラマ教の寺で五色の布切れが無数にひらめいているのと同じ趣だ。ガイドによれば内蒙古の村々には一つずつこうした石積みがあり、年毎に祭当番が各村をまわる。今年白音胡少が当番なので五月十三日の祭りの日に前年の当番村から石積上の木製の塔を引き継いだのだ。来年の五月十三日にはラマ僧がこの塔を捧持し、祭りの参会者

全員が伴をして次の当番村へ持って行く。祭りには全内蒙古の人々が集り大変な賑いとなる。四方の小石積との間に点々とある石の塊の上には供物が置かれ人々は天神の降臨を祈る。神はこの中央の石積み以降りという。丁度日本の古い民族信仰で山頂の岩座に神が天降りますというのとよく似ている。古い土俗信仰にラマ教が結び付いてこの様な祭りの形となったものである。豊稷を神に祈るのだと聞いて一瞬不審に思ったが、彼らにとって豊稷とは羊や馬や駱駝の増える事を指すのだそうだ。私の中の如何にも農耕民族的な考方にひとり苦笑し乍ら、同じモンゴル民族から出た我々と、根元的な宗教観には共通するものがあるのではないかと興味深く思った。

南京林学院 竹類研究室との交流

岡村はた
(昭19・理)



中央筆者

最近、私は専門の斑入り植物よりも竹に関することを多く書いている。それは竹が人々の生活に縁が深いからであろう。日本の林床に多い笹を除けば、竹は中国中部部がその郷里といわれている。

マダケ属は四十種あまりが中国の原産、また、中国南部から東南

りの日本における竹類の研究を通して、いつか中国、東南アジアの大竹の自生地ゆき、それらの生育状態とそこに住む人々の暮らしの中に竹がどのように入り込んでいくかを知りたいと思うようになった。

これらの地方では、掘り棒によ

器と多方面にわたり、今日より広く用いていたであろう。これらは一万年以上の歴史があったであろうが、高温多雨のため、物的証拠は残りにくかった。しかしこのことは今日、その地方の人々の生活を博物館やテレビで見ただけでも、かなり離れた地に住む人々が、同じ目的で、よく似た形の竹製道具を用いていることから、竹は古い時代から生活と深いかわりをもつて人類の移動とともに今日に到ったであろうことが想像できる。

私は昭和五十四、五十五、五十六年の秋、宮内庁の依頼で、故小清水卓二博士、重要無形文化財保持者飯塚小珣斎氏と三人で、正倉院御宝物の竹製品のすべて(約九十点、同類はそのうちの一点)について調査した。

さきあげた用途内容を含んでいるこれら多くの竹製品は竹文化圏の北東端に当たるところで、千二百年前の上層階級の竹文化を示す一端である。この時代に中国からの渡来と考えられる極めて精巧な竹の筆軸がある。奈良時代及びそれ以前、中国や東南アジアとどの程度の交流があったのか、当時バンプーや竹(マダケ属)が奈良周辺にどの程度生じていたか、このような観点から、アジア東部にひ

ろがる竹文化圏の過去から現在に至る竹利用の変遷、すなわち、民族移動に伴い移植したであろう必需品としての竹のひろがり、自然の種としての竹のひろがり、どのようになされてきたか。これが解明されると正倉院御宝物の竹文化に占める位置もはっきりするであろうと考えた。

これらの研究を進めるには、まず、中国の竹研究者と交流すべきだと考え、昭和五十四年七月、六十七歳のモウソウチクの開花を機に、この種実を南京林学院に送り、いくつかの質問を添えて交流を始めた。返事は五十五年二月に来た。それには中国で五十四年秋にとれたモウソウチクの種実がつけられていた。私はこれを全国の研究者に分けた。昭和五十五年秋、竹類研究日中友好団が南京林学院を訪問し、かねて実生された苗を本植えし、中日友好竹林ができ

た。一方、日本でもさきに中国から送られた実生の苗は昭和五十六年秋、国際林業機関連合会議のため来日された熊文愈教授が洛西竹林公園に定植され、また、富士竹類植物園では園主の招待により十日あまりを研究に過ぎた周芳純副教授を記念し、それぞれ日中友好竹林が第一歩を踏み出した。

現在、中国中部の山々は長期にわたり森林が伐採され、材が極度に不足し、これを補うのに政府は毛竹(モウソウチク)をすすめている。その指導的立場にあるのが南京林学院である。農業は自由化がすすみ、五年ごとに生産倍増がすすめられているから、林業の発展も年ごとに速度を増すことであろう。現在まで、造園、園芸方面には指導が及んでいないようである。

今、中国は官民両面から交流がすすめられ、この秋には京大から一人、富士竹類植物園関係から四人が出向き、中国の竹研究会で講演することになっている。私の目的はこれと交換に中国のマダケ、モウソウチクの自生地に行き、さらに次の機会には南部国境辺りのマダケ属とバンプーとの混生地帯まで行きたいと考えているが、どうなることやら少し早く生れすぎたと感じる今日この頃である。

写真は私が送った実生の苗から出来た中日友好竹林、左は熊文愈教授、右は周芳純副教授、記念の立札には赤字で岡村が送ったということも記されている。

最後に、いつも中国語で手紙を書いて下さっている女学校時代の友人、垂谷好子女士に心から感謝の意を表する次第である。

アジアにかけての暖熱帯にはさらに大きいバンプー(ホウライチク属、巨竹属)の自生地がひろがっている。約三十年前、人が二つの道を通り東進してきた時、すでに東亜は竹やバンプーが温熱帯の樹林に混生した状態であったと考えられる。私は過去二十年あま

る根栽農耕の時代から、すでに付近に生じていた竹やバンプーを利用していたであろう。それは中空で石斧や獣骨を用いて処理するには木材よりも容易であったろうから、合板、製紙、製布は極く最近のことながら、日用品、狩猟、農

耕、住居、食用、祭り、武器、楽

美しく老いるために

苦瓜 恒子

(昭15・文)

『美しく老いるために』というテーマを与えられ、今私は一つの転機に立っているのを痛感する。

今年、四十年勤めた教職を退き、これまで支えとなっていたものがなくなつた、糸の切れた風のような頼りなさをしきりと感じる。

『老いる』は自然の摂理だからさておくと、『美しい生』ということを考える時、ふと世阿弥の「風姿花伝(花伝書) 第一年来稽古条々」を思い浮べた。世阿弥の言う「花」は勿論能楽の「花」であるにしても、この人生を一つの舞台と見れば、世阿弥の「花」を人間の生き方につないでみてもよいのではないかと考えたからである。以下目についた箇所を抜き出してみる。

七歳。「必ず、その物自然とし出だす事に、得たる風体あるべし」幼年期の無邪気な愛らしさであるから特に取り上げないでおく。

十二三より。「次第々に、物数をも教ふべし。……二つの便り(形・声)あれば、悪き事は隠れ、よき事は、いよ／＼花めけり」今の人生にあてはめると、二十歳

前後の眩しい若さの美しさである。この美しさを世阿弥は「さりながら、此花は、まことの花にはあらず。ただ時分の花なり」と言っている。若さの美しさとは、所詮ひとときのものである。

十七八より。「一期の堺ここなりと、生涯にかけて、能を捨てぬより外は、稽古あるべからず。ここに捨つれば、そのまま能は止まるべし」人生における自分の生き方を見定め、人間として、社会人として、自立の自覚を持つ頃とでも言えるだろう。

二十四五。「この比、一期の芸能の定まる始めなり」「すは、上手出で来たりとて、人も目に立つるなり」「まことの花にはあらず。年の盛りと、見る人の一旦の心の珍しき花なり。まことの目利は、見分くべし」なかなか世阿弥も手きびしい。

三十四五。「此比の能、盛りの極めなり」「この比天下の許されを得ずは、能を極めたると思ふべからず。ここに猶慎しむべし」この二つは、さしずめ壮年期の間盛りのさまと言えらるであろう。仕事にうち込み、人間としての充実をひたすら求めて生き、そのあり方に責任を持ち、それらから発する美しさがあらわれてくる時期

である。自分の顔に責任を持たねばならぬ頃であり、人生に対する覚悟、生きる姿勢も確立し、そこからかがやきも生まれてくる。

四十四五。「能は下らねども、力なく、やうやう年聞けゆけば、身の花も、よそ目の花も失するなり」「何としても、よそ目花なし。もし此比まで失せざらん花こそ、真の花にはあるべけれ」今でいう所謂熟年の美しさ、いぶし銀の美しさを思うが、これは何と

してもこれまでの生き方とかかわっていることを思えば、私などもう手遅れの感が深い。花伝書の最後に、五十有余。「まことに得たらん能者ならば、物数は皆々失せて、善悪見所は少くとも、花は残るべし」とある。手遅れとは言いながらも、六十五歳まで国語教師として、至らぬながらごまかさず生きてきた積りである。精一ぱい

生きていた姿勢だけは知ってほしいというのが、今まで私の生きる支えであった。ところが、この春の退職によって、支えていたものがどうもあやしくなってきた。世阿弥のいう「見所は少くとも、花は残るべし」をどうすればよいのか、過去ばかり懐しんでいるのでは駄目だと模索をしていた時に、ラジオの放送

でこんなことを聞いた。「銀花」という雑誌の編集長の細井アキコさんという方とのインタビューの一節である。細部は忘れたが妙に心に残ったことは、「雑誌の編集とは人間を磨くこと、すなわち文化を持つことである。といつてもこれという特別なことではなく、最低、食事の時に箸置きを使う、靴は揃えてぬぐうようなことで、これが文化なのです」というようなことであつた。

私も、これからは、誰に知ってほしいというのではなく、自分ひとりのために、人間を磨き、文化を持つことと思つた。食事は人間の生活の基礎となるもので、『美しく』はまず、食事を美しく頂くことから始まり、履物を揃えてぬぐうことによつて、自分ひとりの生活を整えることから始めよう。誰に見られているのでなくとも、自分ひとりの生活をけじめのあるものにしようという心の張りによつて

「花」は残るのではないかと思ひ、どうせ老人だからという気持は持つてはならぬと言ひ聞かせた。今も覚えているのは、女優杉村春子さんの「ちょっとだけ無理をして」という言葉である。老いたち向うにあたり、『美しく』な

んでとんでもない課題であるが、自分自身のため、できるだけ生活をだらしなくしないことに、長年かかって作り上げた自分なりの生活態度が、少しは役立つのではないかと思つたのである。

私の尊敬している年上のご婦人が、いつまでもお若く美しくいらつしやるので、その秘訣をおたずねしたことがある。ご主人は亡くなられ、ご子息二人は独立され、おひとり住まいのその方は、「まずよく働くこと。そして、私ね、ひとりの食事でも一日一度はちゃんとテーブルセッティングをするの。そして、時にはドレスアップして食事をするの」と言われた。

なるほどと思ひ、少しはあやかりたいと思つてこんな句を作つたことがある。

恒子

ひとりの飽華やかに盛り饗の夜ひとりを楽しみ、ひとりの生活を大切にすることによつて、残り少くなつた「花」も残るのではないかと、ひとり暮らしの私は思つたのである。儒教でいう「ひとりをつつしむ」という教えも、案外、美しく老いるための効用を持つのではないだろうか。

昭和五十九年度佐保婦人学級でのお話

昭和59年度陸会

●とき 九月二十五日(火) 十

二時半より

●ところ スカイサントリー

●参加人員三十一名

初秋といってもまだ残暑きびしいこの日に遠近各地からこんなに大勢の方々が集りいただけなのは、足場がよいただけでなく、この集りをどんなにか皆様が待ちこがれておられたことと眼頭のあつ

くなる想いいっぱいでした。まづ母校講堂の美しい緞帳のお話に始

り黙齋の後、次々に皆様から自己紹介をしていただきました。松山姉、武姉、箕浦姉をはじめ長寿を生き抜いてこられた方々の得難い体験談やらお久しぶりに会う感激や有意義なお話がつきることなく、時のたつのも忘れる程でした。最後になつかしい校歌を斉唱し、次の会合を約して散会いたしました。世話係 橋本・大路

風の道

田中 佳世子

(昭40・文・国)

ひとむらの二人静をそよがせて国境の峠を越ゆる山風
葛城ゆ吉野に橋を架けしとふ目ひとつの神は風にあら
ずや

風の道よぎるひとときさわさわと胸の奥処を洗はれて
るつ

山脈を遠けぶらせて裾を引く大和国中雄々しき畝傍
龍在の峠ゆ見返る冬野村五月の風に揉まれて佇つや
国原ゆ吹き起くる風たをやぐに吉野熊野に入りし果て
はも

谷川のひびきに添ひて下りゆけば卯の花白き花数増し
ぬ

昭和60年度

佐保婦人学級

今年「国連婦人の十年」の最終年に当り、また女性の場合は「人生八十年」の時代を迎え、今や人口の半分を占める女性が社会を支える一員として、それぞれの能力やエネルギーを十分發揮できる世の中にするのが強く望まれています。「佐保婦人学級」も開講以来三年目に入り、今年度は下のような二つの学習テーマにつき、グループに分れて調査研究活動すすめるながら三年間の学習の集大成をはかることになりました。

六月から九月までは「高齢者の食生活」をテーマに、各自の一日の献立を持ち寄り、それぞれの栄養素やカロリーを計算して発表、津野先生の助言を受けるといふ実践的な学習をしました。気を付けているつもりでも実際に数字を出してみると、毎日の食生活のかたよりなどを改めて反省させられ、よい勉強になりました。

学習テーマ……国連婦人の十年を迎えて

- 1 高齢者の食生活
- 2 老後の生活設計

と き……左記の通り、午前十時より十二時まで
と ころ……神戸市勤労会館

月 日	学 習 内 容	講 師
6/11	開講式(各自のグループを決める)	津 野 貞 子
6/18	高齢者と食生活	"
6/25	"	"
7/2	新栄養所要量について	"
7/9	"	"
7/16	各自の食生活の実態調査と解析	"
7/23	"	"
9/10	献立のモデル版の検討	"
10/8	"	"
10/15	人権問題(男女差別の問題)	討 議
10/22	"	"
10/29	老後の生活設計	檀 原 そえ子
11/5	"	"
11/12	書道の手ほどき	齊 藤 幸子
11/26	プレゼントづくり	齊 藤 英貞
2/18	研究発表	齊 安 津
2/25	閉講式	"



水落哲子さんを偲ぶ

植田 治子 (昭32・文・英)

きびしい暑さもやっと終りを告
り、秋風がひとしお身にしみる頃
になりました。庭にすだく虫の音
も心なしかひそやかに聞えます。
仏達にとって今年ほど恐ろしい夏
はありませんでした。忘れもしな
いあの八月十二日、水落哲子さん
英語英文学科昭和三十一年卒業
が、他のお二人の先生と共に、日
肌機の墜落事故に遭遇され、急逝
されました。高校一年の担任とし



、来年行われる東北地方への修
子旅行の下見の帰途、この不慮の
事故にあわれたのです。

水落さんは、昭和八年、中国の
北京にお生れになり、そこで少女
時代を過され、戦後御家族共々帰
国されました。大学での思い出は
一年の頃でしたか、大学祭の英語
劇の演出をなさっていたのを憶え
ています。とても物静かで理的な
印象の方でした。御卒業後は、

大和高田市立商業高等学校で教鞭
を取られ、その後御結婚を経て、
昭和三十六年、現在の親和学園に
英語科教諭として就任なさいまし
た。少し早くから勤務していた私
との出会いをとて喜ばれて、奈
良の頃の思い出を二人で懐しく語
り合ったことでした。男のお子様
お二人にも恵まれ、お幸せな日々
をお過しでしたが、今から十一年
前に御主人を急病でお亡くしにな
りました。その後御主人の御両親
と共に、立派に御息を育て上げ
られ、やっとこれからは自分のた
めの生活設計をなさり、お好きな
趣味などを深く究めたいとおっし
やっていたのです。少女の頃の思
い出を求めて、最近では中国旅行を
楽しみ、中国語も勉強しておら
れました。とても器用な、趣味の
広い方で、華道、七宝、ちぎり絵
など、忙しい日々の余暇を心豊か
に楽しんでおられました。

学校では、学年主任としてその
責務を全うされ、他の先生方と共
に、明朗な学級作りを心砕いて
おられ、その成果が実を結ぼうと
していた矢先のことでした。教師

としてのきびしい瞳の奥に、母親
のような優しさを感じていた生徒
たちは、先生の突然の訃報に号泣
しました。呼べども帰らぬ先生の
お姿を求める感じ易い生徒たちの
ことを思うと哀れでなりません。

お三方の中で最後に御遺体の確
認された水落さんの告別式が、八
月二十日、西明石ルーテル教会に
於て、しめやかに執り行われまし
た。猛暑の中を、英文科の同窓の
方々、佐保会の方々も大勢参列さ
れ、御献花下さいました。その後
九月十八日には、ワールド記念ホ
ールに於て、親和学園による合同
慰霊祭が行われ、在校生、卒業生
はじめ学園ゆかりの方々五千人余
りの参列者が涙のうちにお三方の
御冥福をお祈りいたしました。

余りにも突然のこと故、私たち
でさえこんなに悲しい思いでいっ
ぱいのですのに、ましてや御遺族の
方々のお嘆きは、察するに余りあ
るものがございます。成人された
とはいえ、まだ何かと母上を頼り
になさりたいお年頃の御息、同
じ年頃の子を持つ親として、まこ
とに身を切られるような思いがし
ます。どうかお二人共、この悲し
み乗り越えて、強く強く生き抜
いて下さいませ。

最後に、今はもう神の手に導か
れて、天国への道を歩んでおられ
るでしょう哲子さんの、あの世で
のお幸せを心からお祈りいたしま
す。どうか心安らかに眠り下さ
いませ。

—つれづれに「花」—
ご 紹 介

川口 汐子 (昭19・文) 著
春、みつまたの花に始まり、沙
羅の花、水引草、そして冬の八つ
手の花まで約四十種。川口さんの
ことばを借りると、「ふと気づけ
ば、私たちの周囲にいつもさりげ
なく存在する花々」であり、「声
をもつもののあるいは及ばぬこと
ばを備えて咲き揺れる花々」であ
る。それらの花々に忘れがたい女
の思い出を重ね、時に古典の世界
の女人の姿を揺曳させながら、著
者は淡々と、温かく語りかける。
昇外義氏の花の画も美しく、野山
や道端にそれらの花を見かける折
ごとに私はこの本を開いてみる。
教室の席も、寄宿舎も隣り合っ
ていた女高師時代の雪山汐子さん
の声を耳もとに聞く思いで……

女高師時代といえは、この中に
二人の留學生のことも語られてい
る。「ねむ」は郭以明さん、「木
樨」は尹惠源さん。郭さんは中国
服のよく似合うほっそりと美しい
人だった。「汐子と西施は発音が
同じ」と教えてくれたその人を、
芭蕉の「象潟や」の句に重ねて、
「雨を含んだねむの花を見るとあ
の美しい留學生を思い出す」と記
されている。木樨を国花とする国
の尹さん。あの頃は伊原恵子さん
だった。昨年、卒業四十一年の文科
の会に彼女ははるばると出席し、
一人々と抱き合って四十年ぶり
の再会を喜んでくださった。
今、郭さんは大連の外国語学院
で日本語と日本事情(文化・経済
・歴史など)を教え、尹さんはソ
ウルの淑明女子大の教授である。
二人ともそれぞれ立派に成人され
た何人かのお子様を持たれ、家庭
と仕事をみごとに両立させて活躍
なさっている。

夏が来て、トアロードや鯉川筋
のねむの並木道を行くたびに、街
の所々に咲き続ける木樨の花を見
るたびに、私も彼女たちを、そし
てあの頃共に学び、共に暮らした
留學生の人たちを懐しく思い出す
ことだろう。

秋——彼岸花、犬蓼、われもこ
う……川口さんの花々は今年も次
々に開き、散ってゆく。

発行所 神戸新聞出版センター
(東記)

支部総会報告

昭和六十年年度支部総会は、五月十六日十一時より、灘高前の「はや」において開かれました。出席会員六十九名。和室のくつろいだ雰囲気の中で盛会のうちに午後三時を閉じました。

総会次第

- 一 開会のことば
司会 杉山レイ(昭33文)
副支部長 浅野晶子(昭23家)
一 支部長あいさつ 津野貞子(昭8家)
- 二 新入会員歓迎のことば
津野貞子
- 三 新人会員挨拶 (自己紹介)
- 四 議事 議長 津野貞子
- 五 昭和五十九年度事業報告
支部報告 中村京子(昭32理)
本部報告 村田祥子(昭31家)
佐保短大報告
八木静子(昭9文)
大学婦人協会報告
魚崎茂子(昭10理)
- 六 昭和五十九年度会計報告
内山美智子(昭20理)
- 七 昭和五十九年度会計監査報告
大路涼子(昭16保)

役員改選承認

上田ユクエ(昭4文)

◎昭和六十年年度事業計画(案)
寺尾喜美子(昭33家)

◎昭和六十年年度会計予算(案)
内山美智子

◎「支部だより」委員紹介
前編集委員長 坪根ミキ(昭16B理)

◎記念品贈呈
津野貞子

◎記念品贈呈(昭5卒七名)
津野貞子

◎叙勲お祝 安達英子(昭18文)

七 会食

八 閉会のことば

副支部長 安達英子

会食には交員増田先生にもご参加いただき、会食後、津野先生のお受けになった「勲三等宝冠章」を見せていただきました。

ご自身のためだけでなく、佐保会のため、更に広く社会において女性が研究活動を高めていくためにも地道な努力を惜しまれなかつた先生のお心を、勲章の輝きに重ねながら、一同改めて拍手を送りました。(池田・松木 記)

昭和60年度支部役員一覧

支部役員	支部長	津野 貞子 (S8・家)	本部役員	理事	津野 貞子 (S8・家) 村田 祥子 (S31・家食)
	副支部長	安達 英子 (S18・文) 浅野 晶子 (S23・家)		会計監査	坪根ミキ (S16B・理)
	事務局	内山美智子 (S20・理) 中村 京子 (S32・理物) 杉山 レイ (S33・文英) 寺尾喜美子 (S33・家住)		評議員	安達 英子 (S18・文) 内山美智子 (S20・理) 小池 典子 (S33・文英) 寺尾喜美子 (S33・家住)
	会計監査	大路 涼子 (S16・保) 飛鳥 光恵 (S29・家住)		佐保短大理事	八木 静子 (S9・文)
				大学婦人協会役員	魚崎 茂子 (S10・理) 竹田喜代子 (S22・臨数)

昭和60年度地区リーダー一覧

地区名	氏名	地区名	氏名
神戸市東灘区	魚崎 茂子 (S10・理) 柳瀬 あや子 (S42・文)	芦屋市	橋安 よし子 (S9・理) 爪 達英子 (S18・文)
" 灘区	寺尾 喜美子 (S33・家) 山下 知子 (S39・理)	尼崎市	佐藤 すなほ (S19・家) 中野 久子 (S29・理)
" 中央区	横山 しづ子 (S31・文)		中真 潤子 (S33・文幼)
" 兵庫区	上田 ユクエ (S4・文)		鈴木 久子 (S37・家)
" 北区	小田 清子 (S10・家)	宝塚市	中村 俊子 (S9・文) 藤田 美恵 (S32・理)
" 長田区	郷 芙美枝 (S8・理)		谷 沢 郁子 (S20・文) 吉田 俊子 (S22・文)
" 須磨区	近藤 房静子 (S6・文) 八木 静子 (S9・文)	西宮市	
" 垂水区	曾谷 愛子 (S12・家) 竹田 喜代子 (S22・臨数)	姫路市	溝川 美枝子 (S15・家)
" 西区	平田 美都 (S19・保)	赤穂市	山下 静香 (S22・家)
明石市	立石 睦子 (S9・家)	赤穂市	土井 千鶴子 (S36・家)
加古川市	茶谷 万寿代 (S19・家)	野保崎	
伊丹市	斎藤 美智子 (S34・理) 松本 佳代子 (S44・文)	三木市	竹崎 美佐保 (S18・文)



もより会 ご報告より

丹地区

昭和五十九年十一月十一日(日)、丁度文化の日にオープンし、ばかりの「柿衛文庫」を訪れ、本三大俳諧コレクションの一つである岡田利兵衛翁のコレクションを中心とする展示を見学。その昼食を共にして歓談。大正十二卒の山形様から昭和五十七年卒の安田様まで、人数は七名でした。まことに有意義な集りを持たれ、由、松本様(昭44)よりご報告がありました。

北地区

昭和五十九年十二月二十日、森出様(昭29)のお宅で八名の会合した。松山様(大6)・八重野様(大12)の大先輩お二人のお元々なお姿を拝見出来たのが何よりうれしく、また、お若い川崎様(昭51)は小さなお子様連れでご出席でした。曾祖母様とお孫さんを入れたような、ほんとうに家庭的なムードが漂う中で、生き方の指針となるようなよいお話なども伺い、一年の終りに当たってまことに温まる集りになりましたとのこと、リーダーの小田様(昭10)からお聞きしました。

尼崎地区

昭和六十年一月二十七日(日)、武庫之荘の高木様(昭29)のお宅で。十八名の方々がご出席になりました。ずいぶん賑やかに話がはずんだそうです。日下様(大15)のお書きになったものによりますと「健康再生会道場の粉ミルク断食療法」「ご主人の遺稿の整理・出版のご苦労」「賢い利殖の方法」「四人の育児の経験を通しての貴重な生活のコツ」「ナイジェリヤの素的な貫頭衣」から「ご子息のお嫁さん探し」に至るまで、実にバラエティーに富んだ話題の続出だったようです。

ざっくばらんで温かな心の交流が感じられました。

(日下様からは当日の話題をそのまま綴られた文章を頂きましたが、紙面の都合で割愛させて頂きました。お詫びとお礼を申し上げます。)

長田地区

昭和六十年三月三日、お雛祭りの日曜日、長田商店街の「魚勝」で開かれました。第五回目の会合ですが、回を重ねるにつれてお互いの親しさも増し、白酒で乾杯の後会食に移り、それぞれの身辺の変化の報告から、今かかえている老後の問題についての討論など、

楽しく充実した時間を過ごされたこととです。郷様(昭8)からご報告いただきました。

芦屋地区

五月十日(金)午後、二回目の集りを安達様(昭19)のお宅で。十二名出席。橋爪様(昭9)ご丹精の美しい洋蘭の飾られた部屋で今回は北川様(昭14)から「タイ奥地に伝わるみごとな両面刺繍に魅せられての取材の旅」のお話を伺いました。現地の娘さん達の作品など見せて頂きながら、一同時の経つのも忘れる程でした。私達だけで何うのは借いなので、ぜひ支部便りへご発表くださるようお願いしております。

(増日記)



事務局だより

編集後記

◇行事(昭和59・10・60・9)

●本部会報、支部だより第8号、会計報告書、名簿発送(59・11・26)

●新年会(支部だより編集反省会もかねて)(60・1・13)出席29名

●昭和59年度佐保婦人学級閉講(60・2・26)於神戸勤労会館

●支部総会 議事、津野貞子姉受勲お祝、記念会贈呈(60・5・26)

●於「はや」出席69名(新入者6名)

●昭和60年度佐保婦人学級開講(60・6・11)於神戸勤労会館

●睦会(59・9・25)

◇お慶び

●津野貞子姉(昭8・家)

●津三等宝冠章(60・4・29)

●並川明子姉(昭24・保)

●兵庫県教育功労賞(60・5・3)

◇地区もより会

●伊丹地区(59・11・11) 7名

●東灘地区(59・12・10) 20名

●北地区(59・12・20) 8名

●尼崎地区(60・1・27) 18名

●長田地区(60・3・3) 7名

●芦屋地区(60・5・10) 12名

●姫路地区(60・5・19) 30名

秋も深まり、支部だよりをお届けする頃となりました。今回は芦屋地区の五名が担当しました。

これまでのものを参考にさせて頂きながら、なるべく広い層の方々の、多方面にわたる記事をと一応の方針は立てましたが、出来上ってみますと至らぬ点ばかり目について反省させられています。

お忙しい中、ご寄稿賜りました方々、水落様追悼の記をお寄せ下さいました親和学園の植田様、何かとご助言頂きました方々、それから今回も表紙の作品を頂戴しました林画伯、皆様のご厚意に心からお礼申し上げます。

不馴れな仕事でしたが、この事を通じて多くの佐保会員の方々とお話できる機会に恵まれましたのは何よりの喜びであったと委員一同感謝しております。

編集委員

東 昌子 池田和子 月森坤子

増田千代 松木節子

報 告

八木清子	(昭22・理)	(59・12・21)
池田隆子	(昭9・家)	(60・7・19)
水落哲子	(昭31・文英)	(60・8・12)
木本英子	(昭23・家)	(60・9・13)